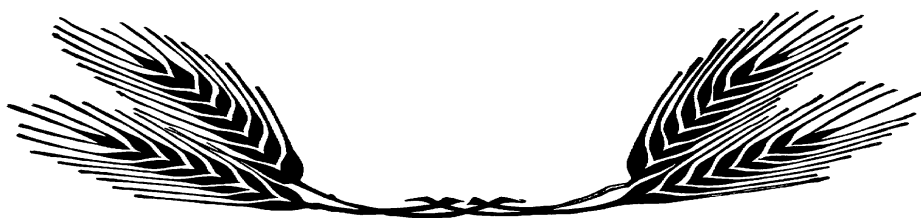


神よ、旅に出かけている私たちを  
あなたの祝福で満たしてください。  
あなたの顔の輝きは旅人の喜びとなりますように  
いつも私たちと共にいてください。  
神よ、あなたは旧約時代のトビアに  
旅のために天使をお遣わしになったように、  
私たちにも天使を遣わして  
困難、道の迷いなどの事故から  
お守りください。私たちの主  
イエス・キリストによって。  
アーメン。

## 目次

---

	ページ
アントニオ・ガウディ	
アントニオ・ガウディの作品群.....	3
アントニオ・ガウディ・イ・コルネット.....	5
サグラダ・ファミリア.....	9
ゲエル公園.....	12
コロニア・ゴエル教会.....	13
モンセラート.....	15
モンセラートの歴史.....	17
ムラネタ.....	20
大聖堂.....	21
イグナチオ・デ・ロヨラ.....	23
ルルドの泉.....	27
聖ベルナデッタ.....	29
ミサ（聖書と典礼）.....	33



## アントニオ・ガウディの作品群

ガウディ(1852年～1926年)は古今東西の折衷様式を唱えたモダニズムの代表的建築家として知られています。そして、アントニオ・ガウディの作品群はスペイン(特にバルセロナ)にあるガウディの作品群で特に、ユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されたものを言います。

ガウディの作品はよく「生き物のような建築」といわれますが、それは彼が「建築は有機体を創造する。それゆえ、この有機体は、大自然の法則に合致した法則を持たなければならない」と考え、有機的なデザインを積極的に導入したからなのです。

### 世界遺産

1984年におこなわれた世界遺産会議においてバルセロナの**パルケ・グエル**、**パラシオ・グエル**、**カサ・ミラ**(Parque Guell, Palacio Guell and Casa Mila)の名称で登録を受けたが、2005年に追加登録をした際に現在の名前に改称した。この世界遺産は、世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ、登録がなされた。

- (1) 人類の創造的天才の傑作を表現するもの。
- (2) ある期間を通じて、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- (4) 人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建築物群、技術の集積、または景観の顕著な例。



ガウディが建築家としてのキャリアをスタートさせたのは、カタルーニャの経済が黄金期を迎えた 1870 年代末から 1880 年代にかけてのことでした。1878 年に建築大学を卒業したガウディは、その年早くも個人住宅カサ・ピセンスの設計を任せ、パリ万博に出展する革手袋店からはショーケースのデザインを依頼されました。この作品が後に彼のパトロンとなるグエル氏の目に留まり、ガウディは成功への階段を駆け上ることになったのです。

1883 年、ガウディが 31 歳のとき、彼の人生を決定づける事件が起こりました。サグラダ・ファミリア聖堂の 2 代目建築家に就任したのです。以降、彼はほかの仕事と併行しながらこの教会の建設にすべての情熱を傾け、1914 年からはこの仕事だけに専念しました。

太字で示したものは、アントニオ・ガウディの作品群として世界遺産に登録されています。

- バルセロナのリアル広場の街灯 (1878-1879 年)
- 革手袋店のショーケース (1878 年) パリ万国博覧会に出品。この作品を通じて富豪エウセビオ・グエルの知遇を得た。
- マタロの労働組合本部 (1878-1882 年) ごく一部ではあるが、ガウディが初めて木材を用いて放物線状のデザインを表現した。
- **カサ・ピセンス (1878-1888 年)**
- サンタンデルのエル・カプリッチョ (1883-1885 年)
- グエル別邸のパピリオンと厩舎 (1884 年)
- **サグラダ・ファミリアの地下聖堂 (1884-1891 年)**
- **グエル邸 (1886-1889 年)**
- アストルガの司教館 (1887-1893 年)
- テレサ学園 (1889-1894 年)
- **サグラダ・ファミリアのアプス外壁 (1891-1893 年)**
- レオンのポティネス邸 (1891-1892 年)
- カサ・カルベット (1898-1900 年)
- **コロニア・グエル教会堂 (1898-1916 年 未完)**
- **グエル公園 (1900-1914 年)**
- **カサ・バトリョ (1904-1906 年)**
- **カサ・ミラ (1905-1907 年)**

## アントニ・ガウディ・イ・コルネット

Antoni Gaudi i Cornet (1852年～1926年)

日本ではアントニオ・ガウディと呼ばれることが多いが、これはスペイン語式の名前で、カタルーニャ語ではアントニとなる。

### 生き物のような建築物

19世紀後期、スペイン北東部のカタルーニャ地方では、繊維工業を中心にいち早く産業革命に成功し、それによって得られた経済力をバックに、自分たちの文化の独自性(カタルーニャ・アイデンティティ)を取り戻そうとするルネサンスにも似た文芸復興運動(ラ・レナッセンサ)が勃興しました。

カタルーニャは、バルセロナ伯国としてローマ帝国崩壊後から大航海時代まで地中海東部の覇権を握ったという歴史があり、本来ポルトガルのように独立国家となっても不思議ではありませんでした。そのため、マドリードを中心としたカスティーリャ地方への対抗心が強く、独自のアイデンティティを充足させるために独創的文化の復興が強く望まれたのでした。

そのムーブメントのなかから出現したのが、モデルニスモという新しい建築のスタイルでした。そして、その象徴的存在となったのが、奇オアントニオ・ガウディだったのです。

ガウディは、1852年6月25日、カタルーニャ地方南部のレウスという街で、貧しい銅板器具職人の家に生まれました。ガウディは、「自分に空間把握能力があるのは職人の家系だからだ」と語るほどその出自に誇りを持ち、公の場でもカタルーニャ語しか話さないような、根っからのカタルーニャ人でした。



幼い頃、慢性の関節リウマチ に苦しんでいた彼は、普通に学校へ通うことができませんでした。そのせいもあり彼の学校の成績は幾何学以外みな人並み以下で、手先が器用なだけの大人しい少年だったようです。そして、激しい痛みのため、遠出する際は口バに乗っていたといいます。このため、自由時間になると家の近所で自然を観察して過していました。こうした幼年期の自然との触れ合いが、自然の造形の観察と分析からデザインを導き出す彼の設計手法に影響を与えたと考えられています。

1873年、21才でバルセロナの建築学校へ進学し、いよいよ建築家になるという夢を現実化し始めます。しかし、当時彼は年老いた父親や姉といっしょに暮らしていた。そしてその生活費を稼ぐためにバイトに励んでいたため、成績はそれ程良くなかった。彼の才能を理解できる人は教授陣の中のほんの一握りにすぎませんでした。

バルセロナ建築学校時代から「狂人か？天才か？」と教授陣を悩ませたほど、特殊な天賦を持ち合わせていたガウディでしたが、彼の一見奇妙と見える建築のバックボーンには、しっかりとカタルーニャ人としてのアイデンティティが生きているのです。それは、ガウディが確立したモデルニスモという新しいスタイルが、古くからイスラムの影響を受けた結果、カタルーニャの地に誕生していた、ムデハル様式の影響を強く受けていることから想像できるでしょう。

## 建築家としてのスタート

1878年3月15日、26歳になったガウディは、建築学校を卒業。まずは助手として働きながら、小さな仕事をこなしつつ生計を立てて行きます。そして、その小さな仕事の中から、彼は大きなチャンスをつかむことになりました。それはある革手袋の専門店からの依頼で作ったショーケースのデザインがきっかけでした。

彼が作り上げたその小さなショーケースは、1878年開催のパリ万博会場に置かれるものでした。ところが、そのショーケースの斬新なデザインは、あっという間に会場の注目を集めるようになります。そして、そんな観客たちの中に、後にガウディにとって最大のパトロン、最高の理解者となる人物エウセビオ・グエルがいました。

グエルはガウディより6歳年上の青年実業家で、父親が築き上げた巨大な繊維会社の後継者として、すでに会社のトップの座にありました。そのうえ、彼の

経営手腕は父親以上で、元々の繊維工業だけでなく、銀行、鉱山会社、セメント会社などの経営にまで手を広げ、スペインを代表する企業家のひとりになっていました。

1883年、31才の時、サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の設計を引継ぐ依頼を受けました。彼は無神論者だったが、キリスト教について学ぶ中で、彼自身に降りかかっていた不幸や成功について、すべては神が導いたことだと気づき始めます。そして、10年間悩んだ末、聖堂建設が自分の天命だと確信し、全てを聖堂建設に捧げる決意をします。そして、現在も建設中の18本の塔を持つ、壮大な聖堂が設計されたのです。

### ガウディ建築時代の始まりと苦悩の日々

彼は、サグラダ・ファミリアの仕事を得たことで、いっきに業界での評価が上がりました。さらに奇想館（1883～1885年）、グエル別邸（1884～1887年）、グエル邸（1886～1889年）などの仕事を平行してこなし、建築家として一流の仲間入りを果たします。しかし、彼にとってすべてが上手くいっていたわけではありませんでした。



### グエル邸（1886-1889年）

もともと彼同様、身体が弱かった4人の兄姉は、早くにこの世を去ってしまい、1880年代にはすでに父親と自分だけしか家族がいなくなっていました。そして、

人一倍内気だった彼は恋をしても、なかなかその思いをうち明けられず、結局生涯独身を通すことになってしまいます。

そんな孤独な彼にサグラダ・ファミリアの建築という大きな仕事のプレッシャーがのしかかることで、彼は少しずつ精神的に追いつめられ始めます。それに対し、彼は 1894 年突然断食を始めます。なんと 40 日間何も食わず、ついには死の危険に陥ります。それは自殺に近い行為でした。幸いこの時は、カタルーニャ地方の文芸復興運動の中心人物だったホセ・トラス・バジェスという神父の説得により、なんとか一命をとりとめました。そして、この時以来彼は、自分の命を救ってくれた神に対する感謝の気持ちが、彼の建築における重要なテーマとなって行きます。サグラダ・ファミリアはまさにその象徴でした。

その後ガウディはそれまでの迷いが吹っ切れたかのように、ぞくぞくと歴史的建造物を生み出し始めます。コロニア・グエル教会堂(1898~1916 未完成)、グエル公園(1900~1914)、カサ・バトリヨ(1904~1906)、カサ・ミラ(1905~1907)どれも 20 世紀を代表する建築物として未だにその価値を失わないものばかりです。

中でも、バルセロナの中心部から離れた場所に、庭園都市型の分譲住宅地の中心として作られたグエル公園は、まるでおとぎ話の世界を訪れた気分させてくれる不思議な空間です。

ガウディは後半生を熱心なカトリック教徒として過しました。1914 年以降、彼は宗教関連以外の依頼を断り、サグラダ・ファミリアの建設に全精力を注ぎました。しかし、親族や友人の相次ぐ死によるガウディの仕事の停滞とバルセロナ市が財政危機に見舞われたことによって、サグラダ・ファミリアの建設は進まず、同時に進めていたコロニア・グエル教会堂の建設工事は未完のまま中止されてしまいました。さらに 1918 年、パトロンのグエルが死去。

この頃の不幸の連続がガウディを変えたと言われています。彼は取材を受けたり、写真を撮られるのを嫌うようになり、サグラダ・ファミリアの作業に集中するようになりました。

1926 年 6 月 7 日、ガウディはミサに向かう途中、路面電車に轢かれました。晩年身なりに気をつかわなかったため、貧民の為の病院に運ばれたため、手当てが遅れ、三日後に息を引き取りました。享年 73 歳。彼の遺骸はサグラダ・ファミリアの地下礼拝堂に埋葬されました。



## サグラダ・ファミリア

サグラダ・ファミリア（カタルーニャ語: *El Temple Expiatori de la Sagrada Família*、聖家族贖罪教会、聖家族教会または神聖家族聖堂）は、バルセロナに建てられている教会。未だに建設中のガウディの代表作として有名。

### サグラダ・ファミリアの歴史

1865年、ヨーロッパ中がコレラの流行によって大きな被害を受けました。この時、宗教書の出版で財を成していたホセ・マリア・ボカベリヤという人物が「サン・ホセ（聖ヨセフ）協会」という組織を設立します。その目的は、失われつつある宗教心を復活させることでした。あくまでも入りやすい民間団体だったこともあり、この団体はしだいに会員数を増やし1878年には60万人を越えました。サグラダ・ファミリア教会は、このサン・ホセ協会が資金を集めて建設を計画、1882年に着工した礼拝堂なのです。



人々の現世の罪を贖うために聖家族に捧げる教会として建設を計画したものです。ただし、この教会は一般大衆を中心につくられた組織だったため資金面に問題があり、このことが後に大きな問題となります。

初代建築家フランシスコ・ピリヤールが無償で設計を引き受け、1882年に着工したが意見の対立から翌年に辞任。困ったボカベリヤは、その仕事を有名な建築家のホアン・マルトレールに依頼しますが、彼もまた多忙のため、その仕事を受けられず、自分の弟子の中でも特に優秀な設計技師ガウディを推薦します。

そのわけで、その後を引き継いで2代目建築家に任命されたのが、当時は未だ無名だったアントニオ・ガウディである。以降、ガウディは設計を一から練り直し、1926年に亡くなるまでライフワークとしてサグラダ・ファミリアの設計・建築に取り組みました。建設のための資金計画が不十分であったため、途中で何度も建設がストップしています。そのおかげで、ガウディは建築が再会されるまでの間、ゆっくりと設計の見直しや新しいアイデアの導入に取り組むことができたのです。

ガウディは仔細な設計図を残しておらず、大型模型や、紐と錘を用いた実験道具を使って、構造を検討したとされます。それらを含め、弟子たちがガウディの構想に基づき作成した資料などは大部分がスペイン内乱などで消失してしまっています（模型も破片になってしまった）。この為、ガウディの死後、もはや忠実にガウディの構想通りとはならないこの建築物の建造を続けるべきかという議論があったが、職人による伝承や大まかな外観のデッサンなど残されたわずかな資料を元に、時代毎の建築家がガウディの設計構想を推測するという形で現在も建設が行なわれています。北ファサード、イエスの誕生を表す東ファサード、イエスの受難を表す西ファサードは、ほぼ完成していますが、本来は屋根がかかる予定であり、またイエスの栄光を表すメインファサードのある南側は未完成です。

東側の生誕のファサードでは、キリストの誕生から初めての説教を行うまでの逸話が彫刻によって表現されている。3つの門によって構成され、左門が父ヨセフ、中央門がイエス、右門が母マリアを象徴する。中央の門を構成する柱の土台には変わらないものの象徴として亀が彫刻され、中央の柱の土台にはりんごを喰えた蛇が彫刻されている。また、門の両脇には変化するものの象徴としてカメレオンが配置されている。中央門では、受胎告知、キリストの降誕、祝福をする天使、東方の三博士や羊飼いだなどが彫られている。左門ではローマ兵による嬰兒虐殺、家族のエジプトへの逃避、父ヨセフの大工道具などが彫られ、右門には母マリア、イエスの洗礼、父ヨセフの大工仕事を手伝うイエスなどが彫られている。

西側の受難のファサードには、イエスの最後の晩餐から磔刑、昇天までの有名な場面が彫刻されている。東側とは全く異なり、現代彫刻でイエスの受難が表現されており、左下の最後の晩餐から右上のイエスの埋葬まで「S」の字を逆になぞるように彫刻が配置されている。最後の晩餐　ペテロとローマ兵たち  
ユダの接吻と裏切り　鞭打ちの刑　ペテロの否認　イエスの捕縛　ポ  
ンティウス・ピラトゥスと裁判　十字架を担ぐシモン　ゴルゴタの丘への

道を行くイエスとイエスの顔を拭った聖布を持つヴェロニカ　イエスの脇腹を突くことになる槍を持つ騎兵ロンギヌス　賭博をするローマ兵　イエスの磔刑　イエスの埋葬と復活の象徴、そして鐘楼を渡す橋の中央に昇天するイエスが配置されている。

最近の状況では観光客の落とすお金によって建築資金の不足は解消され、永遠に完成しないとされていたサグラダ・ファミリアは2026年頃には完成すると言われています。ガウディは、その完成形を見ることなくこの世を去ってしまったわけですが、彼はそのことをそれほど残念には思っていなかったようです。「サグラダ・ファミリア聖堂の建設は、ゆっくりしている。なぜなら、この作品のご主人（神）が急がないからだ」というアントニオ・ガウディのコメントです。

- 1978年、彫刻家・外尾悦郎さんが、日本人として初めて建築作業に参加。
- 2005年、世界遺産に登録。
- 2006年、直下に高速鉄道AVEのトンネルを建設する計画が持ち上がり、教会側は、「地質の複雑さなどから教会建物の『永続性』に重大な危険をもたらす可能性がある」として、地元自治体などにトンネル建設中止の働き掛けを要請している。



## グエル公園

グエル公園（カタルーニャ語：Parc Guell）は、バルセロナにある公園で、バルセロナの街が一望できます。1984年にユネスコの世界遺産に登録されました。アントニオ・ガウディの作品群の1つです。



もともとはガウディの設計した分譲住宅で、1900年から1914年の間に建造されました。広場、道路などのインフラが作られ60軒が計画されていましたが、買い手がつかず、結局売れたのは2軒で、買い手はガウディ本人と発注者のエウセビオ・グエル伯爵だけであったといえます。

グエル伯爵の没後に工事は中断し、市の公園として寄付されました。現在はガウディが一時住んだこともある家がガウディ記念館として公開されています。中にはガウディがデザインした家具なども集められて展示されています。

公園に広がるガウディのデザインはもとより、その当時から車社会になることを予見して作られた陸橋、傾斜の地形を利用した人工地盤など、当時の様々なアイデアが残っています。

## コロニア・グエル教会

1890年、バルセロナ南西約15キロ、サンタ・コロマ・デ・セルヴェジョ(Santa Coloma de Cervello)に、繊維工場を移転する計画がグエルによって始められました。この工業(コロニア・グエル)は、グエル所有の繊維工場、労働者住宅、店舗、学校、文化施設、ホテル、劇場、生活協同組合、教会等から成り、ガウディの指導のもとに建設が進められました。

1898年、人口増加によりグエル家附属のチャペルでは手狭になったため、ガウディに教会堂の設計が依頼されたのです。有名な「逆さ吊りの実験」に基づく模型による設計は、10年近い歳月を要し、1908年着工、1915年地下部分竣工、1916年建設中断という経緯をたどり、地上に立つべき教会は建設されず、地下の教会付属施設のみが教会堂に転用され今日に至っています。

サグラダ・ファミリアは現在でも建設が続行されているが、そのサグラダ・ファミリアの建設に専念するために、こちらは建設半ばでガウディが手を引いてしまいました。結局パトロンはグエル氏も完成していた地下部分だけを教会として転用し、建設を止めてしまったのだと言います。



コロニア・グエル教会外観のドローイング  
計画模型の写真の上に彩色を施したもの

ANTONI GAUDI RAINER ZIEBST 著 TASCHEN より

教会内の博物館に展示してある完成予想図を見れば、当初この教会がどんな風になるうとしていたかが分かります。サグラダ・ファミリアを髣髴させるすばらしいもので、建設を止めてしまったなんてもったいないと思わずにいられない。

だが、今のこの教会もとてもいい。むしろ、今の状態で残されて、却ってよかったのかもしれないとも思います。バルセロナ郊外のここは、駅さえも無人の、およそ賑わいや活気からはかけ離れた場所です。プラタナスの並木、ボロボロの遺跡のようなもの、そして松林の中に、ひっそりと、だが力強い存在感をもって教会が横たわっています。その雰囲気がとてもいい。



コロニア・グエル教会

外観はいかにも土台という感じだ。完成予想図にあった上部をこの上に想像でのっけてみる

内部も独特の空気があって面白い。微妙な角度で立つ柱とその付け根から放射状に張り巡らされた梁はヤシの木をデザインしたものだ。スタンドグラスの形と色がかわいい。何気なくベンチに座ったら、ガウディがデザインしたオリジナルのものだった。オリジナルはひとつだけで、他のはみなコピー。色が違うのですぐ判る。ここまで足を伸ばすのはちょっと大変かもしれないが、コロニア・グエル教会はガウディ好きには必見なので、何とか時間をやりくりして訪れて欲しい所です。

内部： 独特の雰囲気が漂う教会内部  
つつ柱というものは垂直に立てるものだがガウディの手ににかかるとどうもすぐに斜めにされてしまうが、ヤシの木のイメージと聞いて納得。



# モンセラート

バルセロナから 38 キロ離れたカタルーニャの中心地、マンレザやイグワラーダの市の近くにモンセラートの独創的ですからりとした山塊がそびえている。

山頂はサン・ジャロニの頂きで、海拔 1,236 メートルである。

モンセラートの山一帯は長さ 10 キロメートル、幅 5 キロメートル、楕円の周囲 25 キロメートルの広範囲に及んでいる。



紛れもないギザギザ山の姿は、水、太陽、雨、霜、風によってゆっくりと削られたもので、あちこちに枝分かれした小さな山岳帯を形成している。そのすばらしい眺望は多くの人々の幻想を呼び起こし、多数の作家に靈感を与えてきた。

モンセラートの名が初めて記述されたのは、ギフレー・アル・ピロス伯がピレネー山脈のリポイ修道院に寄贈した文書においてである。彼は 875-876 年に、モンセラート周辺の土地をアラビア人から奪還したバルセロナの最初の伯爵であった。888 年には征服した土地の一部を四つの礼拝堂とともにリポイ修道院に寄贈した。そのうち二つは山の麓にあるサン・マルティーとサン・ペラで、残りの二つは、山の高い所にあるサンタ・マリア(現在の聖堂の元になった)と

サン・イスクラ(現存する唯一の礼拝堂で、修道院の庭にある)であった。多分それらは、アラビア人の侵略が始まった年の711年より以前の西ゴート時代に建てられたと思われる。伝説によれば、880年に山の洞窟で聖母マリア像が発見された。そして、その辺りに、当時の司教はサンタ・マリア礼拝堂を建てた。こうして、モンセラートの隆盛が始まった。

## 修道院の誕生

類い稀なる場所、険しい山の姿、山の静けさがすぐにキリスト教徒を魅了し、そこで祈りと懺悔の生活を送る者が現われた。しかし、モンセラートの本当の隆盛はサンタ・マリア礼拝堂の名声の賜であった。



勢力の強いリポイ修道院は自分たちの問題で忙しく、モンセラートに持つ四つの小さな教会のことをほとんど気にしていなかった。また、リポイからモンセラートは遠すぎた。それゆえ10世紀の中頃、モンセラートにあるサンタ・セシリアの修道院長は世俗や宗教の権威が権利を主張するまで、四つの礼拝堂を自分の物にした。

1008年、ウリバはリポイの修道院長になった。モンセラートの四つの礼拝堂と周辺の土地の所有に関する訴えを刷新し、リポイ修道院の所有と決めたのは彼だった。モンセラートの四つの礼拝堂を取り戻した彼は、人里離れたモンセラートの山に新しい修道院を建てることを決め、サンタ・マリア礼拝堂にリポイの修道士の一団を住まわせた。1025年頃である。

この小さな修道院は聖ベネデットの会則によって運営され、すぐに巡礼者が訪れるようになり、聖母が生み出す奇蹟の物語が少しずつ普及していった。巡礼者は引きも切らず訪れ、修道院に寄付が後を絶えなかった。すぐに古い礼拝堂は手狭になり、12世紀に別のロマネスク様式の礼拝堂を建てなければならなくなった。その玄関は現在の聖堂の前廊の横壁に今も残っている。



## モンセラートの歴史

13世紀以来、モンセラートはその特徴を徐々に強めていった。急成長したモンセラートはカタルーニャで最も名声の高い聖地になり、キリスト教世界においても最も高名な聖地の一つになった。

1410年3月10日に、修道院の歴史に最も重要な出来事が起こった。ベネディクトス13世は修道院をリポイ修道院の管轄から独立させることを決め、修道士たちはモンセラートの初代修道院長に、マルク・ダ・ビダルバを選出した。彼は外交の才に長け、カタルーニャの政治に意欲的に介入した。

後継者の一人、アントニ・ペラ・ファレーは彼の方針を引き継ぎ、内乱において、ジュアン2世に対抗することを明確にした。この政治的闘争は修道院に顕著に悪影響を及ぼし、修道生活の実践を困難にし、改革の必要を誰もが感じていた。それが、1493年にカトリック王、フェルナンド2世の介入を許し、修道院はバヤドリッドのサン・ベニート・エル・レアル修道会に併合され、カタルーニャの言語も習慣も知らないカスティリアの修道士がやって来た。



しかし、有名なシスネロス枢機卿のいところである同名の修道院長の指挿のおかげで、モンセラートに改革の時期が訪れた。非常に敬虔で、良い指導者であった彼は『精神生活の実践集』を書いて、修道士の教育と教養を高めることに専念した。また、1499年にはドイツ人の工匠と契約を結び、新しい印刷技術を修道院に導入した。

修道院の創立以前からモンセラートに古くから存在していた隠遁生活は、この時期に充実していき、ナポレオン戦争まで続いた。モンセラートの山に散らばった礼拝堂で隠修士が行っていた労働と祈りの生活は、修道院長が会憲と定着した習慣に従って管理していた。

聖地の活発な活動によって、ロマネスク様式の教会の狭さが痛切に感じられるようになった。修道院長に就任したバルツメウ・ガリガは 1560 年、巡礼者や訪問者の援助を得て、現在の教会の建築に着手し、1592 年に工事は終了した。

17 世紀は、カタルーニャ公国を破滅させた戦争と、バヤドリッドの修道士が持ち込んだ新しい規則が時とともに強い緊張を引き起こしたことなど、モンセラートにとって動乱と困難の世紀であった。収穫人たちの戦争中、中央権力に対して蜂起が起ると、カタルーニャ公国の最高組織であったカタルーニャ総政府議員団は 1641 年、カスティリア王国出身の修道士を国境へ追放した。しかしながら、蜂起が鎮圧されるや否や、バヤドリッドに再従属している。



フランス戦争が勃発すると、戦略的な条件が整わないながらもモンセラートは二度も要塞化した。ナポレオンの軍隊は 1811 年と 1812 年に修道院に放火し、建物全体を爆破した。古いモンセラートのものでは、焼けた石の山と、半壊した建物しか残っていなかった。しかし、聖母像は山のあるところに隠されていたので無事だった。

激動の 19 世紀には、モンセラートは当時の政治闘争を背景に、ゆっくりとした回復と再建の仕事に取りかかった。しかし、すべては 1835 年の所有財産売却法令によって麻痺してしまった。この宗教団体の解散を命じた法によって、修道士たちは修道院を立ち去ることを余儀なくされた。1844 年、彼らが修道院に戻った時、しなければならない仕事が山ほどあった。

1858 年、バヤドリッドの修道会は消失していたので、教皇はミケル・ムンターダスを修道院長に任命した。こうして修道院は絶対的な独立を取り戻し、すぐ

にスピアコのイタリアの修道会に加入した。そして聖地の再建にいっそう努力した。この再建は、ラナシェンサというカタルーニャの文学・文化・政治復興運動と強く結びついていたため、カタルーニャの大衆にとって大きな意味を持っていた。ラナシェンサはカタルーニャの広い分野でカタルーニャの独自性を意識させるに至った。

こうした運動と一致して 1880 年、修道院の想定設立一千年が祝われ、翌年にはレオ 13 世の許可を得て、カタルーニャの守護神として聖母像に冠が被せられた。1892 年、巡礼者の交通の便をはかるためにアプト式鉄道が建設され、それは 1957 年まで運行された。2003 年 4 月、これまでの線をほぼそのまま利用し、これに現在の最先端技術を施した新しい鉄道が開通して、聖地へ通ずる素晴らしい交通機関となった。

最後に 20 世紀においては、マルセット修道院長の存在が際立っている。彼の指揮の下で修道会は図書館を設立したり、カタルーニャの教会の広域に渡って礼拝生活を一新する意味で、1915 年に最初の典議会を開いたりするなど、精力的に宗教文化活動を行った(1965 年と 1990 年にも同様の会議が開かれた)。

1936 年の市民戦争の間は、修道院はカタルーニャ自治政府に差し押さえられていたので、物質的な被害はほとんどなかったが、23 人の修道士が命を失った。戦後、1947 年にアスカレー修道院長の推進の下で、一般の資金援助を得て、新しい聖堂における聖母の即位が祝われた。これは戦後のカタルーニャの民衆と文化の復興を表わす盛大なお祭りであった。



## ムラネタ

歴史によると、現在のサンタ・マリア(聖母)像がロマネスク教会に設置されるや否や、膨大な巡礼者が訪れ、修道院の名声が上がったという。

暗い顔の色から親しみを込めて“ムラネタ”と呼ばれる聖母像は、12世紀の終わりが、13世紀の初めにポプラ材で作られたロマネスク様式の木彫りの像で、何度も修復されているが、特にフランス戦争(19世紀)の後に特別な修復を受けた。穏やかで簡素な美しさをたたえる像は、時の経過とともにニスのゆっくりした変容によって(酸化が進んだため)顔と手が黒くなったと思われる。また、小さなロマネスク教会で何世紀にも渡って燃やされた大ろうそくや灯火の煙のせいとも考えられる。



冠を被った聖母は多色の頭巾、チュニック、金のマントを身につけている。厳かに構えた聖母の右手には一つの玉が乗せられ、その膝には聖母と同じような冠と服を身につけた幼いイエスが座り、右手で祝福の身振りをして、左手には松かさを持っている。

この像は 1599 年にロマネスク教会から現在の教会へ移され、1881 年にはカタルーニャで最も重要な守護聖人として教会法に従って戴冠された。1947 年、現在の聖堂に移された。

イエスの母であるこの像は、モンセラートにおいて精神的存在を表わしながら、長い時を経て名声と重要性を獲得していった。

## 大聖堂

起伏の激しい土地の上に建つモンセラートの聖地の建物は、全く不規則な形をしている。何世紀もの間、破壊と修復を繰り返してきた建築物全体は、修道士の部屋がある大聖堂と、巡礼者や観光客のための宿泊及び接待施設の二つのブロックに分けられる。芸術的に興味深いのは前者の方である。

モンセラートの大聖堂は 16 世紀にバルトゥメウ・ガリガ修道院長によって建てられた。建築を指揮したのはミケル・サストラで、大規模な計画だったことや、自然立地条件の厳しさから完成まで 32 年を要した。1592 年 2 月 2 日に聖別され、信徒に門が開かれた。1881 年、レオ 13 世は教会を大聖堂に昇進させた。1900-1901 年、プラテレスコ様式の正面は二人の兄弟の彫刻による現在のものにとって代わられた。



長さ 68.32 メートル、幅 21.5 メートル、高さ 33.33 メートルの身廊は、建てられた時代と関係なくゴシック様式の丸いアーチで覆われ、側面の六つの礼拝堂を区切っている壁の上に支えられている。建物全体は、ゴシック様式からルネサンス様式への過渡期に位置するカタルーニャのモニュメントの中で、かなり独創的なものである。教会の内部はナポレオン軍による破壊後に修復された。1992-1996 年、様々な手に加えられた正面に原形のルネサンス様式の雰囲気を取り戻すための工事が為され、また内部においても時の経過とともに暗くなった色調をやめて、光を取り戻す作業が行われた。

中央には緑色の大理石でできた階段の上に、モンセラートの山から採石した 8 トンの石の塊でできた中央祭壇がある。



# イグナチオ・デ・ロヨラ

イグナチオ・デ・ロヨラ (Ignacio (Inigo) Lopez de Loyola, 1491 年 12 月 24 日 - 1556 年 7 月 31 日) はスペイン・バスク地方出身、カトリック教会の修道会イエス会の創立者の一人にして初代総長。

同会の会員は教皇への厳しい服従をモットーに世界各地で活躍し、現代に至っている。イグナチオは『靈操』の著者としても有名で、対抗改革の中で大きな役割を果たした。

カトリック教会の聖人で記念日 (聖名祝日) は 7 月 31 日である。



1491 年にイグナチオ・ロヨラはスペインの北部バスク地方、ロヨラ城で生まれた。ロヨラ家はその歴史は 12 世紀にまで遡る名門であり、イグナチオは 13 人兄弟の末っ子として生まれた。冒険好きで、だいが血の気の多い家系らしく、彼の三人の兄も遠い異国の地で軍人として戦死している。彼の名は「イニゴ」であり、「イグナチオ」は自分自身につけた名前である。7 歳で母を失った。

北スペインに住んでいた若い時のイグナチオは、将来は有名な騎士になる事に憧れ、好きな事は騎士物語や恋愛小説を読むことであった。1517 年以降、イニゴは軍務について各地を転戦したが、1521 年 5 月 20 日に行われたパンブローナの戦いで、指揮中に飛んできた砲弾が足に当たって負傷し、父の城で療養生活を送ることになった。

## 修道生活へ

療養生活の間、暇をもてあましたロヨラは騎士道物語が読みたかったが、そこにはなかったので仕方がなくイエスの生涯の物語や聖人伝を読みはじめた。やがて、彼の中に聖人たちのように自己犠牲的な生き方をしたいという望みが生まれてきた。彼は特にアッシジのフランチェスコの生き方に影響され、聖地に

赴いて非キリスト教徒を改宗させたいという夢を持つにいたった。聖人にあこがれるあまり、彼は自分の名前をイニゴから(アンティオキアのイグナティオスにならって)イグナチオに改めている。

その時、彼は宗教者の道を進む決心をして、城を出た。そして、たった一人で旅を続け、フランス人司祭のもとを訪れ、告白を行い、全財産を教会と貧民に寄付し、修道士となる。1522年、31歳の時のことである。



健康を回復すると1522年3月25日にイグナチオはモンセラートのベネディクト会修道院を訪れた。そこで彼は世俗的な生き方との決別を誓い、一切の武具を聖母像の前に捧げ、マンレサ市に近い洞窟の中にこもって黙想の時を過ごした。

そこでイグナチオは啓示を受けたとされている。ここにいたってイグナチオはひたすらわが身を聖母に捧げることを誓った。しかし、以後の彼の宗教的な人生においても軍事的なイメージがよく用いられることになる。

このころ、イグナチオはすでに『靈操』の原案ともいべきものをまとめている。これは彼のもとに靈的指導を求めてやってきた人に対して行った一連の黙想のテーマ集であった。『靈操』の影響はイエズス会にとどまらず、以後のカトリック教会全体にまで及んだ。

1523年に彼は聖地巡礼に出発する。しかし、この時の地中海の情勢は最悪で、キリスト教徒を迫害するトルコ軍や海賊がウロウロしている状況だった。それでも、ロヨラは嫌がる船員達を無理矢理説得して、エルサレムへと出かけた。



そして今度は地元のイスラム教徒たちをキリスト教に改宗させようという無茶を計画するが、仲間たちに説得されて、これを諦め、翌 1524 年に帰還した。

その後の彼は、バルセロナ、アルカラ、サラマンカを渡り歩き、学問三昧の毎日を送る。少年時代に勉強をサボったツケを払わされ、ラテン語などは子供たちに混じって勉強したらしい。

サラマンカにいる時には、そこで警戒され、地元のドミニコ会に拉致同然のやり方で、修道院に監禁される。この時、所持していた「靈操」の原稿が彼らに見つかり、神学者たちはこれを読んで、彼に理解を示し、解放された。

その後、一緒にいる若い同志たちに迷惑をかけるべきではないと判断した彼は、仲間たちと別れ、単身パリに向かう。1528 年のことである。

1528 年、イグナチオはパリ大学に入学し、一般教養と神学を学んだ。パリでは七年学んだが、多くの人々がイグナチオの靈的指導を求めてやってきた。

1534 年までに彼は六人の重要な同志を得ていた。フランス人のピエール・ファーヴル、スペイン人のフランシスコ・ザビエル、アルフォンソ・サルメロン、ヤコブ・ライネス、ニコラス・ボバディリャ、そしてポルトガル人のシモン・ロドリゲスであった。

## イエズス会の創設

1534 年 8 月 15 日、イグナチオと六人の仲間はパリ郊外のモンマルトルの丘の中腹の諸殉教者聖堂で誓いをたてた。彼らの立てた誓いは「今後、七人はおなじグループとして活動し、エルサレムでの宣教と病院での奉仕を目標とする。あるいは教皇の望むところならどこでも赴く」というものであった。これがイエズス会の始まりである。

1537年、七人は教皇から直接修道会としての許可を受けようとローマに向かった。時の教皇パウルス3世は一同の知的レベルと志の高さを認め、会を認可した上で司祭叙階の許可を与えた。6月24日、ヴェネツィアに赴いた一行はアルベの司教から司祭叙階を受けた。当時、イタリア半島では神聖ローマ皇帝や教皇、オスマン帝国を巻き込んだ戦いが行われていたため、聖地への渡航をあきらめ、当面はイタリア国内で説教と奉仕活動に専念する方針をたてた。

1538年10月、ファーヴルおよびライネスを従えて再びローマに赴いたロヨラは、教皇から修道会の会憲の認可を得ることで正式な許可を得ようとした。そして、パウロ3世は1540年9月27日にイエズス会を正式に許可した。このとき、修道会は60人の定員にすべし、という条件がつけられたが、この制限も1544年には解除された。そして1550年には、正式な会則も決まり、活動を開始する。



イグナチオは会の最初の総長に選ばれた。彼は会員たちを欧州全域に派遣して、一般学校と神学校を各地に創設させた。

1553年から1555年、イグナチオは自らの生涯を振り返って「自伝」を口述し、秘書のカマラ神父に書き取らせた。この自伝は霊操の精神を理解する上でも重要な資料となっている。

イグナチオは1556年7月31日にローマで死去。65歳であった。1609年7月27日に教皇パウルス5世によって列福され、1622年5月22日にグレゴリウス15世によって列聖された。

# ルルドの泉

1858年2月、村の14歳の少女ベルナデッタ・スピルーが郊外のマッサビエルの洞窟のそばで薪拾いをしているとき、初めて聖母マリアが出現したといわれている。聖母を見たというベルナデッタは、教会関係者はじめ多くの人々から疑いの目を持って見られた。



しかしベルナデッタが、聖母マリアが自分を「無原罪の御宿り」とであると、ルルドの方言で告げた。それは「ケ・ソイ・エラ・インマクラダ・カウンセプシウ」(QUE SOY ERA IMMACULADA COUNCEPCIOU = 私は無原罪のやどりである)という言葉であった。これをベルナデッタは神父に告げた。これによって神父も周囲の人々も聖母の出現を信じるようになった。なぜなら「無原罪の御宿り」は「無学なベルナデッタが知るはずのない」教会用語だったからである。

ただし「無原罪の御宿り」が教義として公認されたのは1854年であって、その教義の通りにわずか4年後にルルドに聖母マリアが出現したのである。

以後、聖母がこの少女の前に18回にもわたって姿を現したといわれ評判になった。1864年には聖母があらわれたという場所に聖母像が建てられた。この話はすぐにヨーロッパ中に広まったため、はじめに建てられていた小さな聖堂はやがて巡礼者でにぎわう大聖堂になった。

以後、ベルナデッタ自身は聖母の出現について積極的に語ることを好まず、1866年にヌヴェール愛徳修道会の修道院に入って外界から遮断された静かな一生を送った。彼女自身は自分の見たものが聖母マリアであったと言ったことは一度もない。後に尋ねられた時には「(ルルドに聖母が現れ、奇跡の泉があるという)あの話に本当のことは何もありません」と否定したとも伝えられる。彼女

自身、気管支喘息の持病があったが一度もルルドの泉に行くことはなく、より遠方の湯治場へ通っていた。肺結核により 35 歳で( 1879 年 4 月 16 日 )病没し、1933 年に列聖されている。彼女の遺体は今もって腐敗せず、修道女の服装のまま眠るようにヌヴェールに安置されている。

遺体は 1909 年、1919 年、1925 年の 3 回にわたって公式に調査され、特別な防腐処理がなされていないにもかかわらず腐敗が見られない事が確認されている。

現在では、ルルドの聖母の大聖堂が建っており、気候のよい春から秋にかけてヨーロッパのみならず世界中から多くの巡礼者がおとずれる。マッサビエルの洞窟から聖母マリアの言葉どおり湧き出したといわれる泉には治癒効果があると信じられている。「奇跡的治癒」の報告は多いが、中にはカトリック教会の調査によっても公式に認められた「科学的・医学的に説明できない治癒」の記録さえ数例ある(カトリック教会が「奇跡的治癒」を認めることはまれであり、認定までに厳密な調査と医学者たちの科学的証明を求めている。但しいずれも当時の医学水準に基づくものである)。



## 聖ベルナデッタ

ルルドの聖ベルナデッタをご覧ください。1925年、落ち窪んだ眼と鼻、黒ずんだ顔と手をおおい隠すために良質の蠟のマスクがかぶされました。

ベルナデッタは、つつましい家庭に生まれた。家族の生活は、徐々に極貧の状態に陥っていった。その中で、ベルナデッタは常に病気がちな子どもであった。ごく幼い頃からすでに胃が悪くて苦しんでいた。度々喘息の激しい発作に見舞われた。健康が思わしくないために、修道生活への



道は閉ざされているように思われた。フォルカード司教がベルナデッタをヌヴェール愛徳修道会に受け入れてはと提案したとき、総長メール・ルイズ・フェランは、「司教様、彼女は修道院の病室の大黒柱になるでしょう」と答えた。

短い生涯の間に、彼女は少なくとも三度、病者の塗油の秘跡を受けた。彼女は喘息だけではなく、肺結核をはじめ、右膝結核性関節腫瘍．．．等に徐々に冒されていった。1879年4月16日、水曜日、痛みはその激しさを増した。彼女は、たびたび呼吸困難に陥り、そして15時15分頃、ベルナデッタは息を引きとった。

ヌヴェール市当局の許可を得て、ベルナデッタの遺体は4月19日の土曜日まで安置され、人々の崇敬を受けた。サン・ジルダールの修道女たちは、司教の同意を得て、市当局に、ベルナデッタの遺体を修道院の中庭にある聖ヨセフ小聖堂に葬る許可を求めた。1879年4月25日に埋葬の許可が与えられ、4月30日にニエーヴル県知事が埋葬場所について承認した。早速、地下墓地をととのえ

る作業が始められた。1879年5月30日にひじょうに簡単な儀式が行われ、ベルナデッタの棺は聖ヨセフ小聖堂の地下墓地に安置された。

### 第一回「遺体鑑定」1909年9月22日

1909年の秋、ベルナデッタの聖性、諸徳、奇跡についての、教区長による調査が完了した。引き続き、最初の「遺体の鑑定」と呼ばれるものが、行われなければならなかった。それは、民法と教会法にもとづいて、遺体がベルナデッタ自身のものであることと、遺体の状態を確認するためである。この最初の遺体の発掘は、1909年9月22日（水）に行われた。

遺体の鑑定が行なわれた場所で棺の横に、ベルナデッタの遺体、あるいは状況によって遺骨を置くために、白布でおおわれたテーブルが準備されていた。木製の棺のねじが抜かれ、さらに鉛の棺が切り開かれる．．．そのとき、完全な状態で保存されている30年前に亡くなられたベルナデッタの遺体が現れる。腐臭はまったく感じられない。

ベルナデッタの遺体が完全に保存されていたということは、必ずしも奇跡的な出来事だというわけではない。ある種の土壌においては、遺体が長期にわたって保存され、徐々にミイラ化していくことはよく知られていることである。しかし、ベルナデッタの場合、そのミイラ化の状態は驚嘆に値するものであると言い得る。上記のような条件とは逆に、亡くなったときの彼女の病気と体の状態、聖ヨセフ小聖堂の地下墓地の湿気（修道服は湿気を帯び、ロザリオはさびつき、十字架は緑青色になっていた）等々、すべては肉体をたやすく腐敗させ、分解させる要因になり得たように思われる。

### 第二回「遺体鑑定」1919年4月3日

1913年8月13日、教皇ピオ10世は、ベルナデッタ・スビラーの列福調査および列聖調査に入ることを許可し、「尊者の称号を与える教令」に署名した。し

かし、戦争が勃発したため、直ちに調査の手続きに入ることはできず、1918年まで待たなければならなかった。



「尊者」ベルナデッタの遺体の鑑定を、再度行うことが必要であった。1919年4月3日に、この鑑定が行われた。

ひじょうに大切なことは、遺体の鑑定を行った後、医師たちがそれぞれ別の部屋で、互いに相談し合うことなく、報告書を作成したことである。その二つの報告書の内容は、相互にまったく一致し、しかも1909年の博士たちの報告書とも完全に合致している。

今回は、遺体の状態に関してひとつの新しい事実が見られた。それは、「所々にかびと、カルシウム塩と思われる塩の層」が現れていたことである。それは、恐らく第一回目の発掘のときに、遺体を「洗った」ために生じたものであると考えられる。

### 第三回「遺体鑑定」および遺物の摘出。1925年4月18日

1923年11月18日、教皇はベルナデッタの諸徳が英雄的なものであることを宣言した。これによって、列福への道が開かれた。この列福の宣言のために、三回目で最後の「遺体の鑑定」が必要とされた。今回の発掘の間に、ローマ、ルルド、修道会の支部修道院に送られるために、「遺物」が摘出された。この儀式は、ベルナデッタの死後46年後の1925年4月18日に行われた。それは、列福の宣言がまだ行われていなかったため、教会法の定めにしたがって私的なものとして行われた。

外科医は、特に肝臓の保存状態に驚嘆した。「今回の調査でひじょうに心を打たれたことは、明らかに、骨格、腱膜、靭帯、皮膚が完全に保存されていること、筋肉の弾力性と引き締まった状態、特に死後 46 年も経過しているにもかかわらず、肝臓がまったく予期していなかったほど良好な状態のまま保存されていたことである。この器官は本質的にもろく、柔らかいために、ひじょうに速やかに分解するか、あるいは石灰化して固くなる可能性があると考えられる。しかし、遺体を切開したとき、それは柔らかくほとんど普通の状態であった。わたしは、そこにいた人々に、これがごく自然の現象であるとは思われないことを、指摘した。」

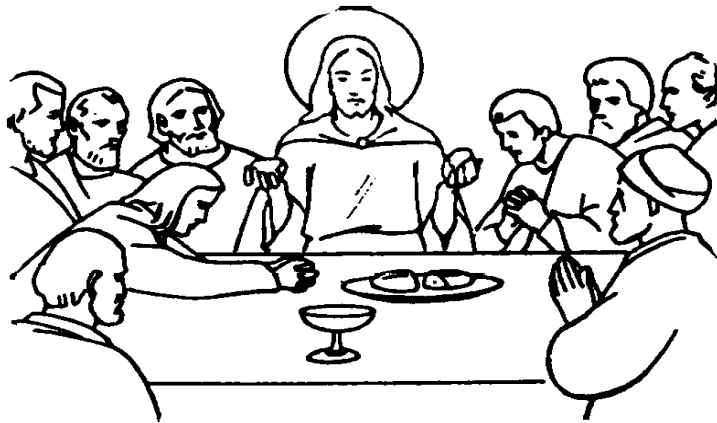
外科的な作業を終えてから、コント博士は、顔と手だけを残して遺体を包帯で巻いた。このとき、正確に顔の型がとられた。それは、パリのピエール・イルマン社で、その型および数枚の本物の写真をもとにして、薄い蠟のマスクを作るためであった。それは、遺体はミイラ化しているとはいえ、黒ずんだ顔、落ち込んだ瞳と鼻が、人々に不快な印象を与えるのではないかと懸念されたからである。同様の理由で、手の型がとられた。棺の中の手の位置を全然変えないように、注意深く処置がなされた。

1925 年 6 月 14 日、教皇ピオ十一世は、ベルナデッタを「福者」として公に宣言した。しかし、リヨンのアルマン・カイヤ・カトゥラン社の工房でつくられていたガラスの棺がまだ完成していなかったため、ベルナデッタの遺体をその棺に納めるのは、7 月 18 日まで待たなければならなかった。その日に行われた儀式は、ひじょうに簡素なものであって、遺体はガラスの棺に安置された。

8 月 3 日の夕方、ガラスの棺は、荘厳にサン・ジルダール修道院の大聖堂へと移された。8 月 4 日、5 日、6 日は、新しい福者をたたえる荘厳な三日間であった。この 3 日間をきっかけに、聖ベルナデッタの友である人々が、次々と巡礼にやって来るようになった。







## 聖書と典礼

## 5日(金)モンセラート巡礼

### 集会祈願

父である神よ、御子イエス葉、「わたしの名によって集まる人々の中にわたしはいる」と約束されました。主が今、わたしたちとともにおられることを思い、その恵みと平和を心から味わうことができますように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 第一朗読 (バルク 1,15 b-22)

#### バルクの頂言

わたしたちの神なる主は正しい方であるのに、わたしたちの顔は今日、恥で覆われています。ユダの人々、エルサレムに住む人々、わたしたちの王、高官、祭司、預言者、先祖たちも皆そうです。それは、わたしたちが主に対して罪を犯し、主に背いたからです。わたしたちは神なる主の御声に耳を傾けず、主がわたしたちに与えてくださった命令に従いませんでした。主がわたしたちの先祖をエジプトの地から導き出された日から今日に至かるまで、わたしたちは神なる主に背き、主を軽んじて、御声に耳を貸しませんでした。そのためわたしたちは今日、数々の災いと呪いに付きまとわれているのです。この呪いは、主が乳と蜜の流れる地をわたしたちに与えようと、先祖をエジプトの地から導き出された日に、その僕モーセを通して宣告されたものです。わたしたちは、主から遣わされた預言者のあらゆる警告を無視して、神なる主の御声に聞き従わず、おのおの、よこしまな心の思いのままに歩いて、他の神々に仕え、神なる主の御前で悪を行いました。

### 答唱詩編 (詩編 32)

主は豊かなあがないに満ち、いつくしみ深い。

わたしは罪をあなたに表し、わたしのとがを隠さずに言う。  
あなたはわたしの罪をゆるし、わたしのとがを清めてくださる。

あなたはわたしの隠れ場、苦しみからわたしを助け出し、  
救いの喜びで覆ってくださる。

### アレルヤ唱

アレルヤ、アレルヤ。神に心を閉じてはならない。きょうこそ神のことばを聞こう。アレルヤ、アレルヤ。

### 福音朗読（ルカ 10,13-16）

#### ルカによる福音

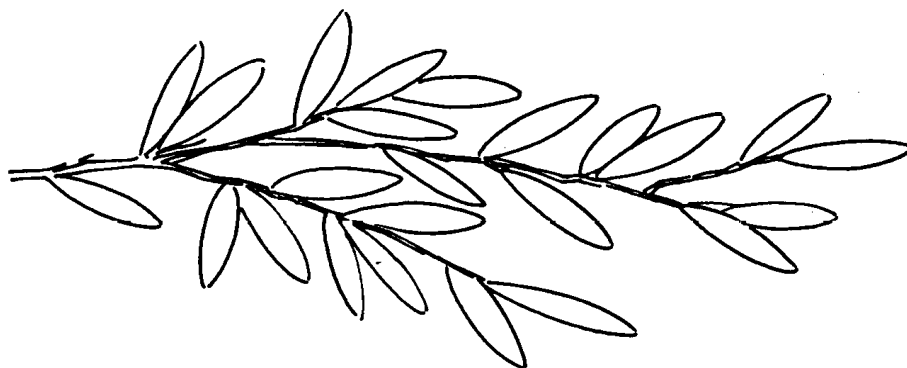
〔そのとき、イエスは言われた。〕「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。しかし、裁きの時には、お前たちよりまだティルスやシドンの方が軽い罰で済む。また、カファルナウム、お前は、天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである。」

### 奉納祈願

全能の神よ、あなたの民の供えものを顧みてください。わたしたちが信仰をもって救いの神秘に近づき、相互の信頼のうちに一致を深めることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 拝領祈願

聖なる父よ、主の食卓にあずかったわたしたちを顧みてください。いつもみ旨に従い、真理のあかしを立てることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。



## 6日(土)モンセラート巡礼

### 集会祈願

いつくしみ深い神よ、聖母マリアを記念するわたしたちが、その助けによって強められ、罪の淵から立ち上がることができますように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 第一朗読 (バルク 4,5-12・27-29)

#### バルクの預言

勇気を出せ、わたしの民、イスラエルを思い起こさせる者よ。  
お前たちが異国の民に売られたのは、滅ぼされるためではない。  
敵に渡されたのは神を怒らせたためだ。  
それは、神にではなく悪霊にいけにえを献げ、  
造り主の怒りを買ったからである。  
お前たちは、育て主である永遠の神を忘れ、  
養ってくれたエルサレムを悲しませた。  
神の怒りがお前たちに下るのを見て、エルサレムは言った。

「シオンの近くに住む人々よ、聞いてください。  
神はわたしに大きな悲しみを下されたのです。  
わたしは息子や娘たちが捕らわれて行くのを見ましたが、  
それは、永遠なる者が彼らにもたらされたものです。  
わたしは彼らを喜びのうちに養ったのに、  
嘆きと悲しみのうちに送り出しました。  
もうだれもわたしを喜びたえないように。  
やもめとなり多くの人に見捨てられたのですから。  
わたしはわが子の罪のため孤独になりました。  
彼らは神の律法から外れました。  
子らよ、勇気を出し、神に向かって叫びなさい。  
あなたたちを連れ去った方はあなたたちを覚えておられます。  
あなたたちはかつて神からの離反をたくらみました。  
回心して、今度は十倍の熱心さで神を求めなさい。  
あなたたちに災いをもたらされた方があなたたちを救い、  
永遠の喜びを与えてくださいます。」

### 答唱詩編.(詩編 69)

主は豊かなあがないに満ち、いつくしみ深い。

神は貧しい人々に耳を傾け、捕らわれびとをないがしろにされない。  
天と地は神をたたえよ、海とその中に生きるすべてのものも。

神は必ずシオンを救い、ユダの町を建て直される。  
神の民がそこに住み、子孫はそれを受け継ぐ。

### アレルヤ唱

アレルヤ、アレルヤ。天と地の主である父はたたえられますように。あなたは神の国のことを小さい人々に現してくださった。アレルヤ、アレルヤ。

### 福音朗読(ルカ 10、17-24)

#### ルカによる福音

〔そのとき、〕七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。言うておくが、多くの頂言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

### 奉納祈願

全能の、父である神よ、聖母を記念して賛美のいけにえをささげます。おとめマリアによって人となられた御子が、わたしたちを永遠の救いに導いてくださいますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 拝領祈願

いつくしみ深い父よ、いのちの糧に強められて祈ります。聖母マリアの光栄を祝うわたしたちが、永遠のうたげにあずかる者となりますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。



## 7日(日)(エンピニ村)

### 集会祈願

全能永遠の神よ、あなたの恵みは限りなく、人の思いをはるかに越えて世界の上に注がれます。わたしたちを罪の重荷から解放し、まことの自由に導いてください。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 第一朗読 (ハバクク 1,2-3・2,2-4)

#### ハバククの預言

主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに  
いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。  
わたしが、あなたに「不法」と訴えているのに  
あなたは助けてくださらない。  
どうして、あなたはわたしに災いを見させ  
労苦に目を留めさせられるのか。  
暴虐と不法がわたしの前にあり  
争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。

主はわたしに答えて、言われた。

「幻を書き記せ。  
走りながらでも読めるように  
板の上にはっきりと記せ。  
定められた時のために  
もうひとつの幻があるからだ。  
それは終わりの時に向かって急ぐ。  
人を欺くことはない。  
たとえ、遅くなっても、待っておれ。  
それは必ず来る、遅れることはない。  
見よ、高慢な者を。  
彼の心は正しくありえない。  
しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

### 答唱詩編 (詩編 95)

神に向かって喜びうたい、感謝の歌をささげよう。

神に向かつて喜びうたい、救いの岩に声をあげよう。  
感謝に満ちてみ前に進み、楽の音に合わせ神をたたえよう

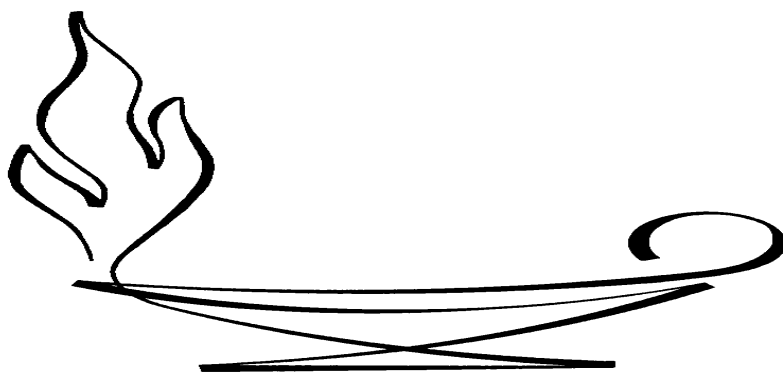
海は神のもの、神に造られたもの。陸も神のもの、神に形造られたもの。  
身を低くして伏し拝もう、わたしたちを造られた神の前に。

神は、わたしたちの神。わたしたちは神の民、そのまきばの羊。  
きょう、神の声を聞くな、神に心を閉じてはならない。

### 第二朗読 (ニテモテ 1,6-8・13-14)

#### 使徒パウロのテモテへの手紙

〔愛する者よ、〕わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたとさせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。





## アレルヤ唱

アレルヤ、アレルヤ。あなたがたに宣べ伝えられた福音は、永遠にとどまる神のことば。アレルヤ、アレルヤ。

## 福音朗読 (ルカ 17,5-10)

### ルカによる福音

使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

## 奉納祈願

いのちの源である父よ、御子の奉獻を記念する供えものを受け入れてください。感謝をこめて行うこの秘跡によって、わたしたちのうちに救いの業が全うされますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

## 拝領祈願

全能の神よ、主の食卓で養われ、喜びに満たされたわたしたちが、キリストのいのちに、日々成長することができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

## 8日(月) (エンピニ村)

### 集会祈願

恵み豊かな父よ、いつくしみをわたしたちの心に注いでください。みことばが人となられたことを信仰によって知ったわたしたちが、聖母の祈りに支えられ、御子の苦しみと死を通して、復活の栄光にあずかることができますように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 第一朗読 (ヨナ 1,1 ~ 2,1-11)

#### ヨナの頂言

主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッフアに下ると、折よくタルシシュ行き船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすり寝込んでいた。船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」

さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐

があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」

乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。ついに、彼らは主に向かって叫んだ。

「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したとって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。人々は大いに主を恐れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。

### 答唱詩編 (詩編 30)

神はわたしを救われる。そのいつくしみをたたえよう

神よ、あなたはわたしを救い、死の力が勝ち誇るのを許されない。

神よ、あなたは死の国からわたしを引き上げ、

危ういいのちを助けてくださった。

滅びは神の怒りのうちに、いのちは恵みのうちにある。

夜が嘆きにつつまれても、朝は喜びに明けそめる。

### アレルヤ唱

アレルヤ、アレルヤ。新しいおきてをあなたがたに与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように。アレルヤ、アレルヤ。

### 福音朗読 (ルカ 10,25 - 37)

#### ルカによる福音

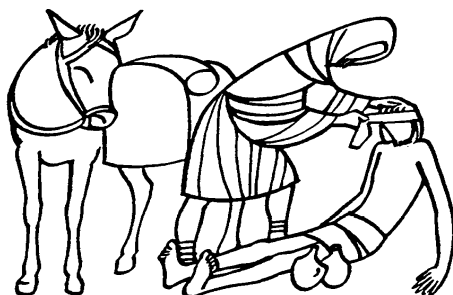
〔そのとき、〕ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうと言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」



### 奉納祈願

聖なる父よ、この供えものとともにわたしたちを受け入れ、み心にかなうものとしてください。御子イエスの神秘を心をこめて記念し、約束された救いにあずかることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 拝領祈願

恵み豊かな父よ、とうとい秘跡を受けて、御子イエスの死と復活を告げ知らせるわたしたちが、主と苦しみをともにすることによって、その喜びと栄光にもあずかることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

## 9日(火)ルルド巡礼

### 集会祈願

すべての人の父である神よ、わたしたちの弱さをあわれみ、助けをお与えください。無原罪の聖母の取り次ぎを願うわたしたちが、罪から立ち直ることができまうように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 第一朗読 (ヨナ 3,1-10)

#### ヨナの預言

主の言葉が再びヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」

ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。

「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」

すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとして灰の上に座し、王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。

「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」

神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。

### 答唱詩編 (詩編 130)

主は豊かなあがないに満ち、いつくしみ深い。

神よ、深いふちから、あなたに叫び、  
嘆き祈るわたしの声を聞いてください。

あなたが悪に目を留められるなら、だれがみ前に立てよう。  
しかし、あなたのゆるしのために、人はあなたをおそれ尊ぶ。

## アレルヤ唱

アレルヤ、アレルヤ。わたしを愛する人はわたしのことばを守る。わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のもとに行く。アレルヤ、・アレルヤ。

## 福音朗読（ルカ 10,38-42）

### ルカによる福音

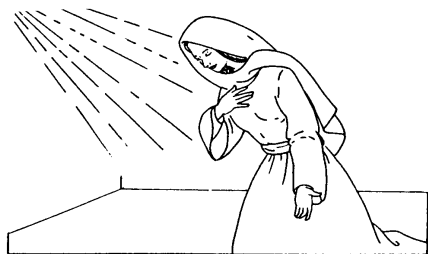
〔そのとき、〕イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけでもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

## 奉納祈願

救いの源である父よ、おとめマリアからお生まれになった御子イエスが、わたしたちの罪を取り除き、この供えものをみこころにかなうものとしてくださいますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

## 拝領祈願

喜びの源である神よ、救いの秘跡に強められて祈ります。御ひとり子の母マリアを祝ったわたしたちが恵みに満たされ、救いの喜びを味わうことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。





メモ帳

20 horizontal lines for writing.

## 聖母マリアへの祈り



恵みあふれる聖マリア、

主はあなたとともにおられます。

主はあなたを選び、祝福し、

あなたの子イエスも祝福されました。

神の母聖マリア、

罪深いわたしたちのために、

今も、死を迎える時も祈ってください。

アーメン。